

児童はイメージ没入性が高い

— 小学生から大学生までの想像活動への関与尺度 III 得点の比較 —

畠山 孝男

(山形大学)

Key words: 想像活動への関与尺度 III, 児童, 中学生, 高校生, 大学生

児童を対象にしたイメージ個人差についての研究は Isaac & Marks (1994), Wolmer, Laor, & Toren (1999) などに限られ、ほとんどなされていないと言ってよい。しかもそれらの研究では、成人向けに作られたイメージテストがそのまま児童に個別事態で施行されている。

筆者はこれまで、趣意を損なわない範囲で元のテストに修正を加えた児童版を作成して、学級単位の集団で施行し、認知課題や事象との関連の分析に活用してきた。畠山 (2018, 2019) はその施行データを用いて、児童のイメージテストの平均得点と相関係数、得点分布について大学生と比較した。その結果、児童は概して鮮明性、統御性、常用性(表象型)、没入性のどの次元のテストについても大学生より幾分評価が高く、テスト間の相関も幾分大きい。得点のヒストグラムの形状は大学生の場合と非常に似ているという知見が得られた。しかし児童の没入性テストの得点が大学生に比べて肯定的方向に大きくずれているのが目につく。本研究では中学生、高校生のデータも加えて、児童から大学生に至るイメージ没入性の発達的变化について検討する。

方法

調査対象者 分析の対象としたのは小学 5 年生 190 名(男 106 名, 女 84 名), 中学 2 年生 250 名(男 117 名, 女 133 名), 高校 2 年生 205 名(男 110 名, 女 95 名), 大学生 196 名(男 87 名, 女 109 名)である。

イメージテスト 没入性のイメージテストとして、想像活動への関与尺度 III (Imaginative Involvements Inventory: Davis, Dawson, & Seay, 1978; 日本版: 笠井・井上, 1993) と、筆者によるその児童版 C-III (畠山, 2005) を用いた。児童版では III の 7 段階尺度を 5 段階にしている。C-III は小学生と中学生, III は高校生と大学生に施行した。

結果と考察

分布の正規性

図 1 から図 4 に、児童, 中学生, 高校生, 大学生の C-III ないしは III のヒストグラムを、歪度, 尖度

を添えて示す。

中学生と大学生の尖度が幾分大きい。それ以外はどの年齢群も歪度, 尖度が小さかった。分布の正規性の検定で、児童はコルモゴロフ=スミルノフ検定とシャピロ=ウィルク検定が、中学生はコルモゴロフ=スミルノフ検定が、高校生は両検定が、大学生はシャピロ=ウィルク検定が正規性を示した。どの年齢群も得点の幅が大きいこと、得点が正規分布を示すことが知られる。

III 得点の発達の比較

どの年齢群とも分布の正規性を示すとは言っても、図 1 の児童の分布が他の 3 群とは違って高得点寄りであることに気づく。そこで 5 段階尺度の児童版 C-III の合計得点を III の 7 段階尺度値に変換して、4 年齢群間で 1 元配置分散分析を行った。 $F(3) = 31.12$, $p < .001$ で有意差があり、Tukey 法による多重比較を行った結果、児童が他の 3 群間より有意に高かった(いずれも $p < .001$) (図 5)。児童は他の年齢群より没入性が明らかに高いことが知られる。

ここで中間値以上に含まれる人数の割合に着目すると、児童は 72.6% が含まれていて肯定側(没入性が高い)に大きく偏っているのに対して、中学生は 46.0% と半数を割り、高校生は 39.0%, 大学生は 38.3% とさらに低い方向にシフトしていた。児童の没入性の高さは発達のな特徴で、小学校高学年から思春期, 青年期にかけて没入性が大きく低下することが知られる。全体的に児童は他の年齢群より没入性、つまり知覚刺激や場面、空想・想像への没入の程度がはるかに高いと言える。こうした発達の傾向としての外的世界, 内的世界への没入が、児童をして学びと遊びに「勤勉性」(Erikson, 1963) を発揮させているだろうことは、十分考えられるところである。

III 領域別得点の発達の比較

C-III, III の領域別の年齢の変動について検討を試みた。各領域の得点について年齢群を要因に 1 元配置分散分析を行った。「感覚体験」 $F(3) = 7.87$, 「劇」 $F(3) = 14.18$, 「読書」 $F(3) = 9.54$, 「幼少時の空想」 $F(3) = 12.19$, 「現在の空想」 $F(3) = 13.01$, 「創造性」 $F(3) = 12.71$, 「宗教」 $F(3) = 19.71$, 「心的冒険」 $F(3) = 43.48$, 「身体的冒険」 $F(3) = 34.97$ で、いずれも p

<.001 で有意差があった。Tukey 法を適用した結果、「現在の空想」を除く 8 領域で児童が他の 3 群より有意に高かった他、「劇」では高校生が中学生より、「現在の空想」では児童と高校生が中学生と大学生より、「心的冒険」と「身体的冒険」では中学生が高校生と大学生より有意に高かった (図 5)。

領域別の中間値以上の人数の割合を示すと表 1 の通りである。この表から次のようなことが知られる。(a) 児童の中間値以上の人数の割合は、どの領域でも他の年齢群より圧倒的に大きい。(b) どの年齢群とも中間値以上の割合が 50% を越えている領域は、「感覚体験」「劇」「現在の空想」「創造性」である。(c) 「感覚体験」と「宗教」は、年齢に伴って割合が徐々に減じている。(d) 「心的冒険」と「身体的冒険」は児童と中学生が多い。(e) 「現在の空想」は高校生が児童に匹敵する多さである。(f) 「読書」と「幼少時の空想」は児童でも 50% 台で多くないが、他の年齢群はさらに少ない。

まとめ

以上の結果から、次のような知見を引き出すことができるだろう。(a) 児童は他の年齢群より没入性が高く、III のほとんどの領域で高い評価を示す。(b) 没入性は小学校高学年から思春期、青年期にかけて大きく低下する。(c) 領域別に見ると、「冒険」は心的、身体的にかかわらず児童が高く中学生もそれに次いで高いが、高校生、大学生では低下する。児童期、思春期の段階が冒険心に親和性が強いことが知られる。(d) 高校生は「現在の空想」が児童に匹敵し、その傾向は「劇」に対する反応にも現れている。空想反応が高校時代に一時的に高まるのかどうかは、検討を要する。(e) どの年齢群とも中間値以上の割合が 50% を越える「感覚体験」「劇」「現在の空想」「創造性」は没入反応を引き起こしやすい領域である。(f) 中間値以上の割合が少ない「読書」は比較的引き起こしにくい領域である。

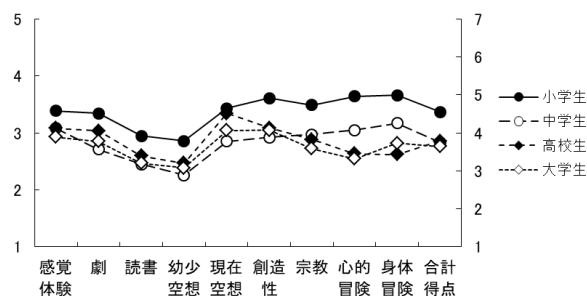


図 5 領域別得点及び合計得点 (1 項目当りの平均値)

表 1 領域別の中間値以上の割合 (%)

領域	小学生	中学生	高校生	大学生
感覚体験	74.2	64.8	66.3	56.1
劇	71.1	49.6	53.2	50.0
読書	57.4	38.8	43.9	38.8
幼少時の空想	53.2	26.4	33.2	31.1
現在の空想	77.4	51.6	73.2	57.7
創造性	77.4	54.8	58.0	54.1
宗教	78.4	60.8	56.1	43.9
心的冒険	85.3	62.8	43.4	41.3
身体的冒険	77.9	64.4	44.4	49.0

引用文献

Davis, S., Dawson, J. G., & Seay, B. (1978). Prediction of hypnotic susceptibility from imaginative involvement. *American Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 20, 194-198.

Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society*. 2nd ed. (仁科弥生訳 幼児期と社会 1, 2 1977, 1980 みすず書房)

畠山孝男 (2005). 児童用想像活動への関与尺度 (C-III) の作成と関与の発達の变化 日本心理学会大会発表論文集, 69, 646.

畠山孝男 (2018). 児童のイメージテストに対する反応—大学生との平均得点, 相関係数の比較—日本心理学会大会発表論文集, 82, 1AM-070.

畠山孝男 (2019). 児童のイメージテストに対する反応 (2) —大学生との得点分布の比較— 日本イメージ心理学会大会発表論文集, 20, 10-11.

Isaac, A. R., & Marks, D. F. (1994). Individual differences in mental imagery experience: Developmental changes and specialization. *British Journal of Psychology*, 85, 479-500.

笠井仁・井上忠典 (1993). 想像活動への関与に関する研究: 測定尺度の作成と妥当性の検討 催眠学研究, 38(2), 9-20.

Wolmer, L., Laor, N., & Toren, P. (1999). Image control from childhood to adolescence. *Perceptual and Motor Skills*, 89, 471-485.

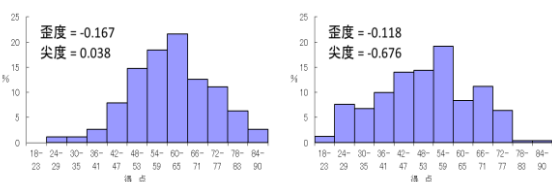


図 1 児童の度数分布

図 2 中学生の度数分布

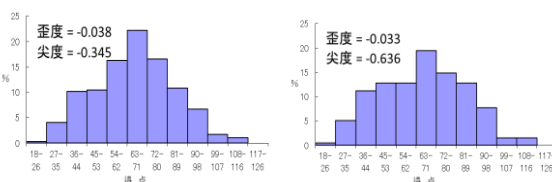


図 3 高校生の度数分布

図 4 大学生の度数分布